

読書感想文入賞作品

『うなぎ 一億年の謎を追う』 塚本 勝巳 著
私の教科書

電子制御工学科1年 本多 渉

私は、「うなぎ 一億年の謎を追う」という本を読みました。この本の表紙にある一億年という、とても長い年月の中で何があったのだろうかと思っている時に、土用の丑の日でうなぎを食べてやっぱりうなぎと一億年がどのように関わっているのか知りたいたと思いました。これがこの本を選んだ理由です。

この本は、世界初のうなぎの産卵地点の特定など「世界のうなぎ博士」と呼ばれている塚本先生がうなぎの調査を通じて、人が生きていく上で大切なことを教えてくれている本です。

この本を読んで、うなぎについて、たくさんのが分かりましたが、私がこの本を読むきっかけとなった、うなぎと一億年との関係は、うなぎの起源が一億年前ということでした。人間の起源よりもはるか前に地球上に存在していたことに驚きました。うなぎは、他にも犬のように鼻がきくことや、夜行性ということなど、今まで考えもしなかったうなぎの色々なことを教えてくれました。

この本を読んで、うなぎの知識以外にも色々教えてもらったことがあります。

一つ目は、塚本先生のうなぎ調査にかける姿勢や思いです。先生は、研究の中で、うなぎの習性はもちろんのこと、昔のうなぎ漁の方法や養殖方法・他国のうなぎ研究内容など、非常に幅広くうなぎについて勉強し、調査しています。私は、今まで一つのことを調査する時に塚本先生のように広く深く調査をしたことがありません。調査で分かったことをさらに深く追求する先生の姿勢は、今後、私が生きていく中で必要なことだと感じました。

さらに、結果が出ない期間が長い時も決してあきらめること無く、何度も挑戦し、何度も考え、何度も調査し、結果を分析し、また次の挑戦を行う姿勢に、物事にねばり強く取り組む大切さを教えてもらいま

した。また、その取り組みの中で、しっかり反省をし、失敗を次の挑戦のチャンスに変えていることが、今の私には、とても重要で必要なことだと思いました。

二つ目は、塚本先生が一番伝えたかったこと、「自分が好きなことを力いっぱいやり続ける」ことです。私は、今も力いっぱいやり続けようと思う好きなことが見つかりません。習い事や勉強や部活動も、目標を立てて、それに向けて頑張ってきたつもりですが、力いっぱいやり続けたか？と聞かれると、はいとは言えません。なので、まず高専生の間に色々なことに挑戦し、今後、心から好きなことを見つける準備をしていきたいと思います。

夏休みにこの本を見つけた時に、始めは、うなぎについての疑問や一億年の意味など、うなぎの生体がどのようなものなのかが、おもしろそうと感じて読み始めましたが、実際に本を読むと、私これから生きていく中で必要な、人生の手本がたくさん書かれていました。私は、はっきりいって、物事にねばり強く取り組むことが苦手です。ねばり強く取り組むことが大切であることは、頭では分かっていますが、実際に行ってみると、とても大変だと感じます。この本は、その大変な取り組みが、自分の好きなことであれば、楽しく出来ることを気付かせてくれました。予想外でしたが、夏休みに出会った、この本をこれからの私の教科書として大切にし、まずは、しっかりと自分が本当に好きなことを見つけていきたいと思います。

『国家の品格』 藤原 正彦 著

一人の日本人として

電子制御工学科1年 今岡 美杜

一つの正解を見出すことが使命の数学者が「品格」というある意味、それが形を成さないものについて何を述べるのか。非常に興味深い本である。

日本は世界で唯一の「情緒と形のある文明」である。国際化というアメリカ化に踊らされてきた日本人は、この誇るべき「国柄」を長らく忘れてきた。論理と合理性頼みの改革では、社会の荒廃を食い止めることはできない。今の日本に必要なのは、論理よりも情緒であると筆者も述べている。先日の核禁止条約交渉にも唯一の被爆国である日本は不参加という形をとった。被爆者の情緒に寄り添うことよりも、核保有国のアメリカの傘下に入り、もし戦争で何かあったら助けてもらう事をアテにした論理的思考に走った。

本書の中でも、品格のある国家の指標を四つ挙げている。「独立不羈」「高い道徳」「美しい田園」「天才の輩出」である。一つ目の「独立不羈」は、文字通り自らの意思に従って行動できる独立国ということになるが、筆者は現在の日本の状況を非常に乱暴な言葉で記している。「現在の日本はほとんどアメリカの植民地である」と。この本は二〇〇五年に発行されたものだが、それから一二年の月日が流れた。筆者に先見の明があったのか。それともあの頃も今も日本がいつまでたっても変わらない国家体制の為、独立国になれないのは必然であったのか。私には後者のほうに思える。しかしながら私は、そう揶揄されながらも世界を救うのは日本人だと思っている。「高い道徳」は日頃の生活では意識していないが、外国人には日本人は善徳や品性を生まれながらに持っていると言われている。「美しい田園」も経済原理だけ

でなく祖国愛に繋がるバロメーターであり、各地で美しい情景を見せてくれている。「天才の輩出」についても、学問、芸術、文化など各方面で老若男女問わず可能にしている。であれば、筆者のいう「品格のある国家」になるには十分な要素がある。

だが、私の意見とは全く別のことを筆者は述べている。この四つの指標についても「以前は持ち合わせていたが、最近では市場経済によりはこびった金銭至上主義に徹底的に痛めつけられ、野蛮な諸外国に荒らされてしまった」と締めくくっているのだ。これを警鐘とし国民を奮い立たせる意図があるのは理解できるが、次への階段を上るとき、自分の置かれた状況を卑下するだけでなく、客観的に見つめ冷静に判断することが何より必要ではないか。日本の品格を守るより、豊かにするためには国民一人一人の力が必要だ。では、今の私に何ができるのか。今何不自由なく勉学をする環境を与えられているのは世界的に見てもありがたいことだと思わないといけない。しかも、自分の好きな道を歩み続け、最先端の技術を学ぶことができている。私は奈良高専に入学し、将来は技術者もしくは研究者になりたいと考えている。それが実現したならば、その成果を日本はもとより世界へ発信していきたいと考えるだろう。その時私は、国家の品格を担う立派な日本人としてその場に立っていたと思う。

図書館の本は大事に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。

『コンビニ人間』 村田 沙耶香 著
 「コンビニ人間」から学ぶ
 「普通」ということ

物質化学工学科1年 吉田 七唯

僕は、「コンビニ人間」という本を読んだ。この本は芥川賞を受賞したことがあるもので表現が非常に面白いと思った。そして、題名にもあるように「普通」とは何かということを考えさせられた。自分が考える普通、話し相手が考える普通、社会が考える普通、これらが一致することもあればしないこともある。この時もし自分が少数派ならば自分は「おかしい」や「異常」と周りから言われることになる。また、自分が逆の立場なら相手をそのように考えてしまうのは人間の心理かもしれない。このようなことがこの作品の中には上手く表現されている。あらすじは、大学生となった主人公の古倉恵子がたまたま通りかかったコンビニでバイトを始め、それ以来十八年間ものあいだコンビニに勤めた。しかし、ある日入ってきたバイトの男性の白羽と出会い、そこから人生が変わる、といったような流れだ。主人公の恵子は幼少の頃からおかしいと周りから言われ続けてきた。具体的な例を出すと、幼稚園の頃に公園で小鳥が死んでいた。周りの子どもたちは可哀想だからお墓を作って埋めてあげようと言っている中、恵子だけは焼き鳥にして食べようと言った。当然周りの人たちは驚くだろうが恵子にとってはこれが「普通」なのである。むしろ僕も幼少の頃にこの考え方ができるのはある意味天才だと思う。今でこそ物事を多面的に捉え、違うアプローチではどうなるのかなどと考えられるようになったが、この頃の僕はごく一般的なアプローチの仕方しか出来なかった。これが社会的に見た「普通」なのである。それに比べて恵子はアプローチの方法が少し違うだけで周りからおかしいと批難されるのである。このように、「普通」と「異常」の差は紙一重なのだ。だが人々は自分とは違う、社会と違うと言って普通に居させようとする。現に恵子も学生時代は余計なことには手を

出さず、ひっそりと生きていた。それからコンビニでバイトを始め、筆者の言葉を借りるなら「コンビニは強制的に正常化される場所」のコンビニにいて建前上で正常化、つまり社会の考え、ごく一般的な考えを持つようになった。正常化された恵子であったがあることをきっかけにそのバリアが破られることになる。それは白羽と同棲し始めたことだ。これは恋人という訳でなく、こちらの方が便利と考えて同棲を始めた。バイトを辞めさせられ行く当分の無かった白羽を恵子が拾ってあげたという具合だ。ここでもまた周りの人から「おかしい」と批難されることになる。便利という事だけで男性と一緒に住むのは「おかしい」と恵子の妹は言った。「どうすれば「普通」になるの？いつまで我慢すればいいの？」と恵子は妹に言われた。僕の主観的な意見だがこのようなことは良くないと思う。確かに「おかしい」、「普通」ではない、そうかもしれないがそれを一つ視点を変えて考えるべきだと思う。すなわち、「個性を殺している」と考えるとどうだろう。一人一人の豊かな感性を普通ではないという理由で潰している、それこそ最もいけないことだと僕は思う。

コンビニ人間を読んで「普通」という事への考え方が少し変わった。普通とは一人一人の豊かな感性、個性を潰す一つの道具に成りかねないと僕は思った。

『正義の証明（上・下）』 森村 誠一 著
 正義とはなにか

機械工学科2年 橋口 司

今回私が読んだのは、「正義の証明（上・下）」である。なぜこの本を選んだのかというと、図書館で読書感想文のために本を探していた時、ふと目に留まりあらすじを読んだところ「これだ！」と感じたからだ。私が惹かれたあらすじの文はこうだ。

"彼はある日、「私刑人」と名乗る謎の人物に襲われる。社会的に批判を浴びる人物に、法に代わって

天誅を加える「私刑人」とは？

法には触れていないが、社会から批判されている人物を殺す私刑人。彼は凄腕の狙撃手で易々と人を殺していく。本書はそんな私刑人と警察の闘いを通じて"法に庇護されなかった弱者と、権力との壮絶な闘いを描く"ミステリーだった。読み終わり、またあらすじを読んだ時にも思ったことがある。それは今の時代SNSを使えば、誰でも「私刑人」になれるということだ。私刑人になれるとは言っても、実際に人が殺せるわけではない。しかし、社会的に「殺す」ことは可能なのではないだろうか。Twitter・LINE・Instagram、高校生がよく使うSNSと言えはこのあたりだろうか。私は主にTwitterを使用しているのだが、例えば少し前にあった「WBCでの山田哲人選手のホームランボールをスタンドに入る前にキャッチしてしまった少年」の話。彼はそのボールを取った写真をTwitterに掲載したのだ。するとどうだろう。瞬く間に拡散され、普段なら野球の話題を見ることがない私のタイムライン上でもその写真を見ることが出来た。まあここまではTwitterではよく見られる反応である。しかし問題なのはこの次だ。なんと約5分後には所属中学校と名前を特定する者が現れ、さらに約30分後には住所を特定する者まで現れたのだ。(この情報はどちらもデマであるというのが現在の通説である。)

これこそSNSにおける「私刑人」ではないだろうか。確かに、WBCという大舞台でホームランボールをスタンドに入る前に取ってしまったことは、野球ファンからすれば怒りが湧くのも当然だろう。しかし、法には触れていない。実際の処罰は、嚴重注意とその球場への今後一切の立ち入り禁止だけだったそう。そんな少年の個人情報や、画面の向こうにいる人の誤った正義や怒りだけでSNS上で拡散しても本当によいのだろうか。それは物語の「私刑人」と同じく、個人の正義で天誅を下しているだけなのだと感じる。この例はあくまで一例だが、このように現代においてはSNSを使うことによって誰でも「私刑人」になることが出来るのだと思う。私たちはそ

れを自覚し、相応のリテラシーを持ってSNSを使用し、個人の正義で行動するのではなく、分別をわきまえて行動するべきだと感じた。

『斜陽』 太宰 治 著 人間の滅びの美しさ

物質化学工学科2年 栗原 悠花

私が読んだ「斜陽」という小説は、華族に生まれた主人公のかず子、最後の貴婦人の誇りを胸に、結核で弱っていくかず子の母、戦時中に行方不明となり、麻薬中毒となって帰ってきたかず子の弟である直治、無頼な生活を送る小説家の上原の四人が、戦後の動乱の時代を生き、美しく滅んでいく様子を描いたものです。私はこの小説を読んで、特に印象に残った場面が二つあります。一つ目は、かず子の母が結核で弱り、亡くなった場面です。顔色などは変わらず、呼吸がいつ絶えたのかもはっきりと分からないくらい静かに旅立ち、その顔は少し微笑みを含んでいるように見えたという様子は、人が亡くなったという場面であるのに、とても美しく感じました。とても不思議な気分になりましたが、かず子も同じ気分になったのではないかと私は考えています。かず子の母は、日本で最後の貴婦人と呼ばれるに値する最期だったのだらうと私は思いました。二つ目は、かず子の弟である直治の遺書です。戦場でアヘン中毒となって帰ってきた直治は、家に帰ってから家のお金を持ち出しては東京へ行き、荒れ果てた生活を送っていました。母は病気にかかり、家のお金は底をつき始めているといった、とても大変な時に、直治は遊んでばかりで、私が初めに感じた印象は非常に悪いものでした。そんな私にとって、直治が自殺したというのはとても意外なことで、驚きました。直治の遺書の内容は、生きていなければならない理由が分からないこと、民衆への憧れを抱いていたが、民衆になりきれずに思い悩んだこと、上原の奥さん

にずっと恋心を抱いていたことなどでした。遊んでいるだけだと思っていた直治が、多くのことで悩み、それを誰かに打ち明けることもできず、ただ一人で苦しみ続けていたことを知り、心がとても痛くなりました。もし、直治が誰かに心の内を明かすことができたのであれば、もっと違った未来、命を絶たずに済んだ未来があったのだろうかと考え、とても辛くなりました。私がこの小説で特に注目したことは、かず子の前向きで、自分に正直な性格です。没落華族となり、家を売り払って伊豆の別荘に住むことになってしまっても、明るく生き、地下足袋を履いて農業をすることも嫌がらず、それどころか気楽だと考えていて、自分がどんな状況になっても、前向きに生きているんだと考えました。また、上原という妻子持ちの男性でも、好きだからと手紙を送り、会いにまで行くといった行動力は、自分の気持ちに嘘をつかず、正直でいた結果なのだろうと私は思いました。私は、かず子のような性格ではありません。かず子は、私よりも何倍も人生を楽しんでいるのだろうと想像すると、私もかず子のような性格になりたいと思いました。

かず子、かず子の母、直治、上原は四者四様の滅び方をしていきました。私は、どれも美しく滅んでいったと思います。私にとって「斜陽」は、永遠に心に残るものだと思います。

『世界から猫が消えたなら』 川村 元気 著
世界から消えたなら

物質化学工学科2年 竹本 奈菜

この物語は、余命宣告された主人公に悪魔と名乗るものが現れ世界から何か一つ消すことで命を1日延ばすことが出来ると伝えることから始まる。しかし、消すものは悪魔が決める。この小説では「何かを得るためには何かを失わなければならない。」という言葉が多く出てくる。主人公にとってそれは1日

の命を得るために世界からあるものを失くしていくことだった。またあるものをなくす時、最後に一度だけそれを使うことが出来る。その時に主人公は自分の本当に大切なものに気づいていくことになる。

一つ目は、世界から電話が消えたなら。消される前に主人公は最後に1度だけ電話を使うことが出来た。ここで主人公は1人の女性に電話をかけた。この女性は主人公にとって電話との繋がりが深い人であった。人見知りの主人公にとって声だけで会話が出来た電話は大切な会話手段だったんだと思う。私も電話が世界から消えた時を考えてみた。私は会話の手段としてだけでなく音楽を聴いたりSNSを利用したりと1日の多くの時間を携帯電話に使っていると思った。しかし、逆に考えると電話というものに縛られているともいえる。無くなったとしたら、1日の時間を有意義に使えるだろうと思った。

次に世界から映画が消えたなら。映画は主人公にとって1番の趣味であり、大切な友達との青春の思い出でもあった。私も趣味が無くなった時を考えてみた。趣味が無くなってしまふことは、趣味を楽しんだ仲間や家族との思い出まで無くなってしまふことである。これを無くしてしまうのは辛いことだと思う。主人公は映画が無くなることで、父や母と初めて映画を見た時のことを思い出した。主人公にとっては大切な思い出を思い出す機会になったともいえる。

そして最後、世界から猫が消えたなら。普通の人としては、自分の命より大切であると考え、あまり無いかもしれない。しかし主人公にとって猫は自分の幼い時から一緒に暮らしてきた家族であり亡くなった母がとても大切にしていた存在であった。なので主人公は消すことが出来なかった。私も世界から猫が消えることを考えてみた。私は昔から犬を飼っている。この点はすごく主人公の立場と似ていると思った。なので私も自分の命と引き換えに存在を消すことはできないと思う。なぜなら動物(猫)は人間の心を癒してくれる存在だからである。心を癒すというのは誰でも出来ることではない。なので私

はそこまでして生き続けたいとは思わないと思う。猫を消すことをやめた主人公は、世界から自分が消えることになる。主人公は長い間連絡を取っていなかった父に会いに行くことにした。私が明日死んでしまうと分かったら、したい事は山ほどあっても何も出来ない気がする。世界から色々なものを消していく中で主人公はゆっくりと自分の余命と向き合うことが出来たのではないかと思う。

この小説を読んで自分だったらどうするだろうと考えることが出来た。一見、ありえないように思うが中身を読んでみると身近に感じる内容だった。私はいつ終わるかわからない毎日を今まで以上に大切に過ごしていくべきだと改めて考えさせられました。

『災神』 江島 周 著

人が共に立ち上がる時

機械工学科3年 末永 共助

東日本大震災、熊本地震、九州地方の豪雨による水害。日本はこの近年の間だけでも、多くの大災害に見舞われている。その度に、多くの人は「日本は復活できるのか…?」と、大きな不安に駆られたことだと思う。特に、現地の様子、惨状を目の当たりにした人からすると、「最早、再建は不可能だろう」と感じたとしても無理はないと思う。しかし、そのような大災害に見舞われても、日本はいつも、立ち直ってきた。確かに、完全な復興とは到底言い難いと思うし、被災された方々の傷は、そう簡単には拭えないだろうと思う。けれど、それでも日本の人々は、力強く立ち上がり続けてきた。

「災神」。この本は、僕に大きな衝撃を与えた。

舞台は出雲。海から突如現れた、蛇のような巨大生物、ミズチ。それは出雲を跡形もなく粉砕し、人類を根絶しようとする。そして、出雲の緊急事態を知った政府は、自衛隊に出動命令を出す。その中に、自衛官候補生の新野陸士がいたのだ。彼は、高校卒

業後、自衛官候補生になり、二年の訓練期間の後、元自衛隊所属という肩書きを手に、転職をしようと考えていた人物だ。つまるところ、彼には日本のために命をかける気は、毛頭ない。その彼に、出雲への出動命令が下ったのだ。最早、自分の運命を呪うことしかできなくなった彼だったが、現地で数人の生存者と出会うことで、少しずつ変わっていく。最後には、ミズチと一対一で対峙し、心の中で、こう言った。「俺たちは、お前に負けたりはしない」

彼に力を与えたのは、ツイッターに日本全国から寄せられた、激励の言葉だった。単なる言葉が、どれほど力をもっているか、僕も知ることができたと思う。人と人とのつながりの温もり、そして、その大切さを学ぶことができた作品だった。

この物語の最後で、主人公の新野陸士は、あの時の俺は、血管の中が沸騰しているみたいに興奮していた。自分を犠牲にして戦った人々の心に触れ、俺たちを救おうとする人々の言葉に触れ、熱い気持ちに突き動かされて行動した。だが、この気持ちはやがて風化するだろう。出会った悲劇の痛みを忘れ、心の熱量が下がり、あの時の決断を後悔する日さえやって来るかもしれない。と言っている。そう、悲劇の記憶は、関係者以外忘れてしまうものなのかもしれないのだ。だからこそ、僕は記憶に留めたいと思う。例え、直接自分が被害にあっていなくとも、どこかで苦しみ、闘い、そして乗り越えようとしている人々が、今もいることを。綺麗事かもしれないが、それが、「共に立ち上がる」ということだろう。そうしてやっと、言えるのだ。

「俺たちは、お前に負けたりはしない」と。